「聖なる夜にさよならを」

仁田葉月

【登場人物】

真司（２２歳）・・・真紀の弟。アルバイトをしながら
　　有名なバンドマンになる夢を追っている。
真紀（２７歳）・・・真司の姉。社会人。夢を追う真司を応援している。

【設定】

クリスマスイブの日。外は雪が降っている。
狭いアパートの一室。
ふたりの父親は幼い頃に亡くなっている。
母親が仕事をしていたため、ある意味真紀は真司の母親代わり。
母親も数年前に亡くなり、今はふたりで生活をしている。
※シーン２以降、真司は死んでいる。普通に会話をしているが、
　実際は真紀自身が思い描く幻想や理想のようなものである。
（今も生きて、こうであって欲しかった等）

（セリフ上にある○○○は、
脚本上では記載するが実際には言葉として発さなくても良い）

【シーン1】

クリスマスイブの夜。（事件当日）外は雪が降っている。
アパートの一室。室内は電気がついていない。

SE 《テレビのニュース1》が流れる。
SE 《テレビのニュース1》が消えると共に照明変化。
（ライブのような照明）
照明変化すると、リビングに真司が立っている。
※リビングは、身近な生活用品でライブ会場のように
セッティングされている。。

真司「（アーティストになりきって）今日は武道家来てくれてありがとう！
俺は歌も下手くそだし楽器だってろくに弾けない。
けどな、俺には魂、スピリットがあるんだよ。
この魂、スピリットだけは誰にも負けない。
この魂、スピリットがこの俺とお前らをここに導いてくれたんだ。
おまえら、ラスト行くぞ、地獄へ逝く準備はできてっか？
音楽は世界を救う。だから俺歌います。『武道館行こうぜ！』」

真司、上裸になり熱唱する。

真司「武道館行こうぜ！Ye！
エクスタシーのその先へ　いざゆかん
俺はまるで無限
明日のことなんて関係ない　自分の道を行くだけさ
俺は魂　マイロード進む　道」

スーツ姿の真紀、仕事から帰ってくる。
手にはスーパーで買った買い物袋を持っている。

真紀「ねぇ！」

照明変化。（室内の灯り）

真紀「外まで聞こえてるんだけど！
（真司の姿に気づいて）ってなんで脱いでるの！？真冬に！」
真司「おーい！今いいところだったのに！」
真紀「近所迷惑だって言ってるでしょ！壁薄いし。
てか見てるだけで寒いから服着て。あと片付けて！」

真司、服を着ながら散らかったものを片付ける。
真紀、部屋着に着替える。

真司「せっかく音楽の神が降りてきたところだったのに」
真紀「はいはい。てか真司、バイトは？」
真司「今日は休みにした」
真紀「はい？昨日も休みじゃなかった？！」
真司「うん」
真紀「その前の日も」
真司「うん。休んだ」
真紀「あんたねー」
真司「ちょ、真紀！そんな怒るなって」
真紀「だから呼び捨てで呼ぶなって言ってんだろ！
姉ちゃんかお姉さまと呼べ」
真司「ごめん姉ちゃん」
真紀「ほーんとあんたって奴は。こちとら毎日社畜やって、
好きなことする暇すらないってのに。しかも今日はイブよ。
繁忙期！」
真司「まぁまぁ、これには訳があるんだよ」
真紀「訳って何よ！」
真司「それはな・・・」
真紀「（真司の言葉を遮って）
あ、てか大家さんに電気の調子が悪いって言ってくれた？

水道代の支払いとか」
真司「あっ・・・」
真紀「もー！ちゃんと伝えておいてって今日の朝言ったよね？
もう22だろ。しゃきっとしろ、しゃきっと！」
真司「いや、それは・・・」
真紀「お前、マジでいっぺんベランダに吊るすぞ？」
真司「怖いよ！そんな怒ってたらシワ増えるよ！」
真紀「んだコラ！」

真紀、真司の胸ぐらを掴み、ベランダのドアを開けて引きずろうとする。

真司「いやだから！訳があるんだって！」
真紀「その訳ってやつ、しょうもない理由だったら
ベランダに吊るすからな。」
真司「それだけはもう勘弁！
って、ちょいちょい！姉ちゃん手離して！
大家さん見てるから！」
真紀「あ？」

真司と真紀、ベランダの下にいた大家さんと目が合い、会釈する。
二人はゆっくりと部屋の中に戻る。

真紀「・・・で？訳ってのは何なの？」
真司「あ、そうそう」

真司、ズボンのポケットから携帯を取り出し、メールの画面を見せる。

真司「これこれ」
真紀「・・・dream catcher？」
真司「そう！」
真紀「え、待って、dream catcherってめっちゃ有名な
インディーズレーベルじゃん！え、なに？どういうこと？」

真司「実はスカウト来ました！」
真紀「え、まじ！？」
真司「まじまじ」
真紀「え、すごいじゃん！いつ！？」
真司「昨日！」
真紀「え、おめでとう！」
真司「俺が作詞した曲を聴いて連絡きたんだよ！」
真紀「（怪訝な顔をしながら）まじで？」
真司「おい、まじでとか言うなよ！音楽は上手い下手じゃない。
　魂だって。姉ちゃんも分かるだろ？」
真紀「いやまぁそうだけど・・・まぁ、うん。そうだね。
　魂が大事だとは思うよ」
真司「だろ？」
真紀「訳ってのはそういうことね」
真司「そういうこと」
真紀「んで、さっきのあのよくわかんない歌は？」
真司「よく聞いてくれました。ここからが一番大事なんだよ！
　・・・なんと新曲です」
真紀「新曲？どういうこと？」
真司「スカウト記念でだよ！その名も『武道館行こうぜ！』」
真紀「だっさ！ネーミングセンスの欠片もねぇな。
　てか、まだデビューが決まったわけでもないのに何やってんのよ」
真司「いてもたってもいられなくてさー。こうなんつーか？
　全身の血がふつふつと沸き立つ感じ？
　魂の声を書き起こしてそれをガーッと歌にしたわけよ！
　んで、今からライブしてくる！」
真紀「はい？今から？」
真司「That´s Right!」
真紀「どこからツッコめばいいのかわからん！」
真司「この曲は絶対売れるぞー。それで俺は昔の約束を果たす」
真紀「いつまで言ってんのかね・・・」
真司「男に二言はない！」

真紀「果たしてあの曲で行けるのか・・・。」
真司「間違いないね。俺はいつだって夢を叶える男だぜ？」
真紀「どこまでもポジティブですごいわあんた。」
真司「真紀も見に来てよ！！」
真紀「だから。姉ちゃんて呼べって言ってんだろ！
この前出かけた時、友達に見られてて彼氏？とか言われたの
ちょー恥ずかしかったんだから」
真司「えーいいじゃん。俺イケメンだし」
真紀「そういう問題じゃないし、どの口が言ってんの？
本当一発殴ったろか！？」

真紀のスマホに電話の着信が入る。
SE《電話の着信音》が流れる。
真紀、電話に出る。
SE《電話の着信音》が消える。

真紀「はい、もしもし。お疲れさまです！はい、はい。
え？明日会議？え、そんな急に言われても・・・。
私、資料持って帰ってきてないですよ？
・・・はい・・・。はい。わかりました。今から取りに行きます。
はい、失礼します」

真紀、電話を切る。

真司「仕事？」
真紀「そう」
真司「本当忙しいなー」
真紀「フリーターのあんたとは違うんです。
急に明日会議入っちゃったから資料取りに一旦会社戻らなきゃ。
（準備をしながら真司の方を向いて）
ダッシュで行って駆けつけるから。」
真司「おっけ、待ってるよ！姉ちゃんが来る頃には場を悲鳴が聞こえるほど、

沸かせておくからさ！」
真紀「まーたいつもみたいにお客さん2人とか嫌だよ？」
真司「大丈夫だって！俺を信じろ」
真紀「わかった。楽しみにしてる」
真司「じゃあ、俺先に行ってるから。よっしゃあ！やるぞー！」

真司、服を脱いでブンブン振りまわしながら部屋を出て行く。

真紀「服は着てけーーーー！」

照明変化。
SE《テレビのニュース2》が流れる。

【シーン2】

事件から一年後。クリスマスイブの夜。外は雪が降っている。
アパートの一室。
部屋着姿の真紀、一点を見つめている。
真司、帰宅する。

真司「ただいまー！」

照明変化。（室内の灯り）
SE《テレビのニュース2》が消える。

真紀「おかえり！」
真司「今日も大盛況だったわ。デビュー一周年とクリスマスイブ記念ライブめちゃくちゃ最高だったー。あ、てか体調大丈夫？」
真紀「うん、今は大丈夫！」
真司「仕事のしすぎなんだよー。今まで支えてくれてた分、俺が今度は支える番だから！」
真紀「なんか今日はすごい良いこと言うじゃん。真司のくせに生意気」

真司「俺は姉ちゃんが元気でいてくれることが一番だからさ！
たった一人の家族だし」
真紀「はいはい、ありがとね」
真司「そうだ！聞いてよ。初のテレビ出演！
花とかいっぱいもらっちゃった。しかもめっちゃ
可愛い女の子とかがさ、涙しながらくれたわけよ！」
真紀「すごいじゃん」
真司「だろ！？今年の名曲一位は『武道館行こうぜ』だってさ。
やっぱ俺天才だわ」
真紀「こんなにもバカと天才は紙一重って言葉が合う人は
真司以外いないわ」
真司「それ褒めてる？」
真紀「もちろん」
真司「あ、てかね。次どんな曲にしようか悩んでるんだよね。マネージャーか
ら新しい曲が欲しいって言われてさ」
真紀「新曲ねー」
真司「姉ちゃんはどんな曲が聞きたい？」
真紀「え、私？」
真司「そう！」
真紀「なんで私に聞くの？」
真司「勘！強いて言うなら姉ちゃん好きだから！」
真紀「なんだそれ。気持ち悪い！自立しろ！」
真司「相変わらず刺さる言葉を言うなよ。
小さい頃俺の歌聞いてすごい！って涙して喜んでくれた
姉ちゃんは何処に・・・」
真紀「うるさい！」
真司「はい、いただきました！ありがとうございます！」
真紀「なんなんだよ！コントか！」
真司「ナイスツッコミ！」
真紀「もうやってられないわ・・・」
真司「それで？！どんなのがいい？」
真紀「うーん、そうだなぁ・・・。あんたにしかできない曲を聞きたいな」

真司「なにそのアバウトな感じ」
真紀「急に言われても浮かばんわ」
真司「俺にしかできない曲か・・・。あ、こんなのはどうかな！」

真司、歌う。

真司「君は今何をしてる？　僕は今歌ってるよ
泣かないで Oh Baby！　このティッシュで涙を拭けよ
泣かないで　Oh Baby！　このティッシュで水で流せる！」

真司「どう？」
真紀「だっさい！」
真司「ひでぇな！」
真紀「言葉がダサいのよ！もっと本を読め、本を！
でも、まー真司らしくて好きだわ。
ほんと、あんた昔から音楽好きだよね。ゴリゴリのロックバンドの曲流さないと寝ない赤ちゃんなんてそうそういないよ」
真司「へへへ。・・・俺はさ、もっともっと有名になるよ。
有名になって世界中に愛を伝えていくんだ！
音楽は世界を変える力を持ってる。俺にはその力がある」
真紀「口だけは達者なんだよな」
真司「俺、口から先に生まれてきたからさ！」
真紀「な訳あるかい！」

部屋の電気の調子が悪くなる。
電球がチカチカと点滅する。

真紀「あ、電気」
真司「また調子悪いな」
真紀「本当勘弁してよね。あーもうまた大家さんに言わなきゃじゃん」

真司、部屋の電球を触ろうとする。

真紀「あんたできないでしょ！」
真司「できるよ！俺、２３だし。
こうさ、ギュッとやってボンってやってパリーンって！」
真紀「割ってんじゃん！絶対やらせない！あーもういいから」

真紀、真司に代わって電球の様子を見る。

真司「てかさ、もうこの部屋いっそ引っ越すか。貯金もあるし！
世田谷あたりのマンションとか！あ、下北沢もいいな」
真紀「んー。でも万が一のために貯金はしとかないと」
真司「万が一って？」
真紀「老後とか？」
真司「もう老後のこと考えてんの？」
まだまだ俺ら２０代だぜ？今を生きようぜ」
真紀「本当どこまでもポジティブだな。
あのね、２８にもなるといろいろあるの」
真司「いろいろって？」
なんかこう、勢いだけで生きていくみたいなのができなくなるの。
まぁ、そりゃあ私だってやっとけばよかったなぁーなんて思う
こともあるけど、手のかかる弟もいますしね。」
真司「大変ですね」
真紀「あ？」
真司「すみませんでした」
真紀「ほんとあんたは今のことばっか考えて突っ走って！
それでお母さんにもよく怒られてたでしょ？」

真紀の話の途中で部屋のインターホンが鳴る。
SE《インターホン》が流れる。

真司「あ、大家さんかな？ちょっと行ってくるわ」
真紀「あ、ちょっと！」

真司、部屋を出て行く。
照明変化。
SE《テレビのニュース3》が流れる。

【シーン3】

事件から二年後。クリスマスイブの夜。外は雪が降っている。
アパートの一室。
部屋着姿の真紀、部屋を見つめている。
真司、帰宅する。

真司「うー寒い寒い。ただいまー！」

照明変化。（室内の灯り）
SE《テレビのニュース3》が消える。

真紀「おかえり」
真司「めっちゃいい匂いするじゃん！」
真紀「特製貧乏カレー」
真司「お、懐かしいー！じゃがいもゴロゴロ入ってるやつ！」
真紀「そうそう」
真司「母さんが仕事遅いと姉ちゃんよく作ってくれたよね。
俺、これ好きなんだよね！でも急になんで？」
真紀「なんか作りたくなったんだよね」
真司「楽しみだぜ。あ、姉ちゃん！
なんと、今日は重大発表があります」
真紀「お、なになに？」
真司「なんと、武道館決まりましたー！」
真紀「本当！？」
真司「一昨年の路上ライブから武道館だよ！すごくない！？」

真紀「そうだね」
真司「ん？どうした？」
真紀「ううん、なんでもない。すごいじゃん！」
真司「だろ？武道館記念にデビュー曲やろうと思って！」
真紀「デビュー曲・・・」
真司「そう！『武道館へ行こうぜ！』やっぱこれで最初は飾ろうかなってさ！
全ての始まりだし」
真紀「そうだね」
真司「あの時の盛り上がりは今でも忘れらんないなー。
もうさ、わーとか、きゃーとか、もはや歓声というか悲鳴って感じ？」
真紀「┄┄」
真司「最初は全然人が集まんなかったけど、ラスサビで大勢の人が
集まってきてさ！めっちゃ嬉しかったなー！」
真紀「そうだった、よね」
真司「姉ちゃんにもみて欲しかったよ」
真紀「結局忘れ物取りに行って、辿り着いたのはライブ終わった後
だったもんね」
真司「まぁでも、約束の武道館決まりましたから！」
真紀「武道館やるの？」
真司「うん、やるさ！」
真紀「本当に？」
真司「本当に」
真紀「嘘じゃないよね？」
真司「嘘なわけないだろ。疑ってるの？俺信用されてない！？」
真紀「いや、信じてる。信じてるけど」
真司「どうした？今日姉ちゃんなんかおかしいよ？変なものでも食った？」
真紀「いや別に。なんでもない・・・」
真司「じゃあ、そんな姉ちゃんのために一曲歌ってあげよう！」

真司、歌う。

真司「寂しい時はカレーを食べよう。

とびっきりのカレー。姉ちゃんのカレー。
ゴロゴロじゃがいも！お腹いっぱい！心もいっぱい！
苦しい時はカレーを食べよう。
とびっきりのカレー。思い出のカレー。
ゴロゴロじゃがいも！お腹いっぱい！心もいっぱい！」

真司「どう？曲名もゴロゴロじゃがいもカレー！」
真紀「曲名からしてダサすぎ！てかどっかで聞いたような気がする・・・」
真司「だってこれ姉ちゃんが作ったやつだよ？」
真司「え、そうだっけ？」
真司「覚えてないの？てか、ダサいとか言ってるけど、
人のこと言えないからな！」
真紀「うっさいな！」
真司「姉ちゃん、一緒に歌おうぜ！」
真紀「なんで急に。いやだよ」
真司「いいじゃん！」
真紀「いいって」
真司「はい、ほらせーの！」

真紀、真司に言われ渋々歌うが楽しくなってくる。

二人「寂しい時はカレーを食べよう。
とびっきりのカレー。姉ちゃんのカレー。
ゴロゴロじゃがいも！お腹いっぱい！心もいっぱい！
苦しい時はカレーを食べよう。
とびっきりのカレー。思い出のカレー。
ゴロゴロじゃがいも！お腹いっぱい！心もいっぱい！」

真紀「懐かしいなー」
真司「でしょ？」
真紀「本当よく覚えてたね。私すっかり忘れてたわ」
真司「だってこの歌めっちゃ好きなんだもん」

真紀「そういえばよく歌ってってせがまれてたな」
真司「父さんが死んでから母さんは毎日仕事で夜遅かったじゃん？」
真紀「そうだね」
真司「小学校から帰ると姉ちゃんの歌声が外まで聞こえてたんだよ」
真紀「え、嘘！？外まで聞こえてたの？はずっ！」
真司「なんかこの歌聞くとさ、なんかこう、
ここが（心臓を抑えながら）ポカポカするんだよね」
真紀「なにそれ」
真司「んで、玄関開けると、カレーのいい匂いと姉ちゃんが楽しそうに
歌ってるわけ。俺の原点！」
真紀「そういえば、あんた急に三者面談で音楽やりたいって
進路相談の紙破り捨てたことあったね」
真司「うわ懐かし。ロックだったでしょ！」
真紀「（真司の真似をしながら）ロックだったでしょ！じゃないわ！
あの時の先生の顔と私の顔よ！
死んだ母さんも絶対同じ顔してたと思うよ」
真司「あれ、めっちゃ面白かった！」
真紀「面白かったじゃないわ！本当びっくりしたんだから」
真司「でも最終的にはお前の人生だからって言ってくれたじゃん。
今まで姉ちゃんにはずっと迷惑かけてたけど
こうしてやっとビッグになれたことだし！」
真紀「今でもの間違いじゃなくて？」
真司「そんなこと言うなよ！」

部屋の電気の調子が悪くなる。
電球がチカチカと点滅する。

真紀「あっ」
真司「まーたか」
真紀「・・・」

部屋のインターホンが鳴る。

SE《インターホン》が流れる。

真司「あっすみません、いつもいつも」

真司、部屋を出て行く。

真紀、どこかに電話をかける。

SE《電話の呼び出し音》が流れる。

真紀「もしもし」

照明変化。

SE《テレビのニュース4》が流れる。

【シーン4】

事件から三年後。

クリスマスイブの夜。外は雪が降っている。

アパートの一室。

スーツに着替えた真紀がいる。

真司、帰宅する。

真司「たっだいまー!今年のイブコンサートも最高だったー!」

照明変化。（室内の灯り）

SE《テレビのニュース4》が消える。

真紀「おかえり」

真司「いやーやっぱ音楽っていいわ。うん。

あの会場の盛り上がりつーの?あの、ほら、

お客さんと一緒になって、みたいな?なんて言うんだ?」

真紀「一体感?」

お

真司「あーそれそれ！そう、一体感があってさ。
これぞ音楽。生きてるって感じがする！って姉ちゃん？
なんでスーツに着替えてるの？」
真紀「転職決まったから」
真司「え、おめでとう！」

部屋の電気の調子が悪くなる。
電球がチカチカと点滅する。

真司「あ、また大家さんに言わなきゃじゃん」
真紀「大家さんに言っといたよ」
真司「お、ありがとう！やっぱさここの部屋出て行こうぜ。
もっといいところいっぱいあるって」
真紀「・・・ここ解約することにした」
真司「うん、そうしよ！」
真紀「もうさ、いい加減終わりにしよう」
真司「どうしたの急に」
真紀「ううん、終わりにするのは私だ」
真司「姉ちゃん？どうした？具合でも悪い？なんか変なもんでも食った？」
真紀「・・・」

部屋の電気の調子がまた悪くなる。
電球がチカチカと点滅する。

真司「あーもう鬱陶しいな。俺、取り替えるよ」
真紀「替えられないでしょ」
真司「それくらいできるよ」
真紀「だからあんたは替えられないでしょ」
真司「大丈夫だって。もう２５なんだし」
真紀「２５になんかなってないでしょ！」
真司「・・・」

真司の動きが止まる。

真紀「三年前の今日。私が忘れ物取りに会社行って、
あんたのスカウト記念の路上ライブのあの日。
人が沢山いて盛り上がってたよね。
あんたの大学時代のライブ思い出しちゃった。
たったお客さん二人だけのライブ。
正直、私は見ててガッカリしちゃったよ。こんなもんかって」

真司、真紀はお互いの言葉が通じなくなる。
※お互いに見えてはいるが、
真司はあくまで真紀の抱く幻想として演じる。

真司「今日はみんな見に来てくれてありがとうな！
たった二人でも俺は魂を届ける！」

SE《歓声》が流れる。

真紀「昔からずっと私の後を追いかけてきたあのちっちゃい男の子が
こんなこと言うなんて・・・。
武道館。ううん、世界に羽ばたいていくのをちゃんと見届けたいって
思った。・・・それがなんだよ。路上ライブ中に事故で死んだ？
しかも、交通事故に遭いそうな野良猫助けて？そのあとに
坂道から落ちてきたベビーカー助けた拍子に頭打って死んだ？
ふざけんなよ！人がいいのにも程があんだろ！
確かに有名になったよ。でもそれもたった一年だけ。
テレビでもずっとあんたの曲流れてたのに一切流れなくなった。
道行く女子高生が涙ながらに惜しい人を亡くしたなんて、
薄っぺらいことを吐いて花を置いてる映像。
今もずっとこびりついてる。
お前のバンドマン人生たったの一年かよ！
腹が立つ。あんたにも、他の人間にも！

・・・あんただけには生きていて欲しかった。
世界中の人間が死のうがどうだっていい！」

SE《歓声》が消えていく。

真司「姉ちゃん！聞いて聞いてこの曲！」
真紀「知ってる。私、知ってるよ。これも全部私が見てる馬鹿な夢だってこと。でも毎年足がこの部屋に向かって、それで確かめちゃうんだよ。あんたが今でも生きてるんじゃないかって」
真司「姉ちゃんの作るカレー大好きだよ！」
真紀「でもそれも今日で終わり。この夢から覚めなきゃ。私は私の人生を生きていく。生きていくんだよ！」
真司「音楽は世界を救う！だから俺！歌います！武道館行こうぜ！」

真司、真紀に向けて歌うが真紀には届かない。
SE《武道館行こうぜ！》が流れる。

真司「ロックが俺を呼んでる
俺の歌よ響け
マイ　マイ　ウェイ　ウェイ　進むぜ　俺はフェラーリ
笑いたけりゃ笑えよ　俺は歌い続ける
今はまだ遠いけどいつの日かきっと
武道館行こうぜ！Ye！
エクスタシーのその先へ　いざゆかん
俺はまるで無限
明日のことなんて関係ない　自分の道を行くだけさ
俺は魂　マイロード進む　道」

真司が歌っている中、真紀は部屋を見渡す。

真紀「・・・行ってきます」

真紀、部屋を出て行く。
部屋には真司の声だけが響いている。
照明が徐々に暗転すると共にSE《武道館行こうぜ！》が消えていく。
暗転。

幕